

オランダ古地図 *IAPONIA REGNVM* をめぐって

松枝 到

——要旨

人類は、そのはじまりからみずからの行動の軌跡を経験として記憶に強くとどめていただろうし、やがて言語を獲得し、精緻なイメージでたがいの経験を交換できるようになると、そこにはかならずなんらかの意味での「地図」が生まれていただろう。出アフリカ以降、人類の歴史はそのまま移動と発見の歴史であった。そこに地図が生まれるが、地図製作の歴史においてひとつの頂点をなすのが17世紀オランダ地図である。昨年度、和光大学に収蔵された2葉のオランダ製作の日本地図は、まさしく日本という空間を世界のなかに付置する最初の試みの事例であり、アジアの歴史を見るうえでの貴重な道標である。本研究ノートは、これらの地図を、地図学上の資料としてだけでなくアジア文化史・アジア政治経済史などの多様な分野における資料として活用すべく、ここから発する研究の可能性を素描したものである。

はじめに

この研究ノートは、和光大学が昨年度に購入した2葉の古地図、*Iaponia Regnum* (1655年ころ) および *Nova et Accourata Iaponiae Terrae Esonis.....* (1659年ころ) について、若干のデータと成立の背景を要約するものである。

地図学 (Cartography) の観点において、この2葉の地図は、製図法および製作技法の歴史的な特異点をしめしている。ヨーロッパの地図製作の歴史から言えば、古代ローマのプトレマイオス (c.83年~c.168年) が著した『地理学』は、ルネサンス以前には長く忘れられていた書物となっていた。しかし1406年にラテン語訳され、さらに1475年に印刷本が出版されて再発見されることになり、それまで等閑視されていた経緯度を用いる地図が見直されるきっかけとなり、エラスムスがギリシア語原本を校訂出版するまでになる。またゲラルドゥス・メルカトルの世界図の革新以降の新たな地図法の展開が、大航海時代の海図の革新に影響を与えることになり、その反映がこれらの地図には顕著に見られる。しかし今回は、こうした地図学的な側面はあつかわない。別の機会を待ちたいと思う。また中国・日本などが同時期に製作した東アジア地図との比較も興味ぶかい課題だが、きわめ

て広範な議論を要するため、これも今回は割愛する。こうした点についての地図学上の議論については、ここに参照しやすい書目をあげておくにとどめる。

- ・織田武雄『地図の歴史 世界篇・日本篇』（講談社学術文庫）、とりわけ第五～七章。
- ・ヴィンセント・ヴィーガ／アメリカ議会図書館『地図の歴史』（東洋書林）、120頁以下。
- ・ジェイソン C ハバード『世界の中の日本地図——16世紀から18世紀 西洋古地図にみる日本』（柏書房）

ここでは、なによりもまず、和光大学の所蔵することとなったこの古地図が、今後の本学におけるアジア研究の進展にたいしてもつ意義をしめし、多様な研究活動に役立てていただくための基礎データを明らかにすることを第一義としたい。

データ

まずこの2葉の地図のデータを示しておく。

(A) IAPONIA REGNVM [日本図] (本書巻頭カラー図 A)

製作者 Martino Martini
出版社 Joan Blaeu
刊行 Amsterdam, ca.1655
41×56 cm 銅版刷 手彩色

(B) Nova et Accurata Iaponiae Terrae Esonis ac Insularum ex Novissima

Detectione Descriptio Apud Ioannem Ianossonium
[蝦夷地および日本列島の新詳細地図] (本書巻頭カラー図 B)
製作者 Jan Janssonius
刊行 Amsterdam, ca.1659
45.7×55.9 cm 銅版刷 手彩色



図 A

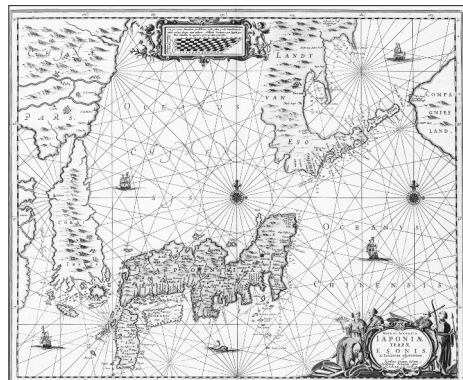


図 B

これらの地図についてはさまざまな研究があり、たとえば (A) に関しては、豊富な日本古地図のコレクションをもつインズベリー日本藝術研究所 (イースト・アングリア大学、イギリス) のサイトが詳細な参考文献を列挙している⁽¹⁾。まだそれらを精査していないが、主に地図学上の研究対象となっているようである。また (B) については、本図を所蔵する東京海洋大学付属図書館のサイトに丁寧な紹介があり⁽²⁾、海事研究の側からのアプローチが見られる。大津眞作 (甲南大学名誉教授) の記すその解説を以下に引用する。

この地図は、恐らくイエズス会宣教師たちの日本布教報告を資料に描かれたものであろう。地名が全部ラテン語表記になっている。右下のカルトゥーシュには、ラテン語で、—— IAPONIAE=Japoniae (日本) および蝦夷 ESONIS (エソ) と表記されている。当時のエソは今のカムチャッカ半島と混同されていたことが分かる。太平洋と今日の黄海、東シナ海はいずれも OCEANVS CHINENSIS (シナの大洋) と記されている。

作者は、ラテン名で Ioannem Ianssonium ヨアンネム・ヤンソニウム、オランダ語名 Jan Janssonius ヤン・ヤンソニウス (1588-1664) で、オランダの地理学者。この地図が掲載されている書物は、『詳細世界新地図』で、1649年にアムステルダムで公刊された (アムステルダム大学図書館書誌情報より)。ちょうど会津あたりに Iede とあるのが江戸であろう。それに反して琵琶湖の北に Meaco つまり「都」がある。京都である。Osacky が大阪である。長崎も Nangesaky と記されていて興味深い。一層興味深いのは、それ以前に、日本の海洋基地であった平戸島=I.Firando が記されていることである。朝鮮半島の先に本来ならフィリピン海域から太平洋に位置づけられる I. de Ladrones すなわち「泥棒島」ラドロネス島が位置づけられているのが興味深い。今のグアム島で、1521年に世界周航をしたマゼランが発見し、島民の所有観念の希薄さから、この名をつけた。そのマゼランは、まもなく現地住民との戦いで戦死する。

いまはこうした専門研究の領域には立ち入らないが、さまざまな形で注目されている地図であることを確認しておきたい⁽³⁾。

地図の 1600 年代

岩波『国語辞典』で「地図」の項を引くと、「一定の地域の状態を縮尺して平面に描いた図」とある (第3版)。他の事典・辞書もほぼ同様の定義を採用するが、これは基本的に地図製作学のとる視点である。このように「地図」という用語を地形の平面図の意味で用いるようになったのは、基本的に明治以降のことであって、たとえば英語の Map および Chart の訳語としてあらためて採用されたものと思われる。ただ中国においては「地図」の語を「海陸山川を図に描きあらわしたもの」〔戦国策、趙〕として用いる例があるのだから、漢語としての使用例は多くあるにちがいないと思われるものの、通常は地形図などは

「絵図」と呼ぶものであった。

平凡社『世界大百科事典』(第2版)に「絵図」の説明として

19世紀(明治前期)以前の日本での普通の地図に対する呼称。そもそもは条里制施行時代、農地の状態を表した図に〈田図〉〈文図〉があったが、条里名称などを注記した方格のみの〈田図〉を〈白図〉と呼び、方格のほか山川、湖海、道路、家屋など地形・地物を記入した〈田図〉を、〈白図〉と区別して〈絵図〉と呼んだようである。〈文図〉は条里座標に基づく農地の位置および面積などを記載した一覧表を指したものと考えられる。漢字の〈図〉は〈系図〉という語からも連想されるように、主語・述語の明瞭でない一覧表的記事をも意味することがあるからである。

とある。おそらくは明治維新以降の国家体制整備の過程で、軍事上の理由から西欧型の地図学導入が進められたことにもなう用語法の採用だったのではないか。もちろん日本も西欧の地図作成法を早くから認識していて、概念的・感覚的な「絵図」から実測的・実用的な「地図」への転換をはかったものだろう。日本に西欧的な素描法が導入された当初、その目的は絵画の写実性などではなく、地形の正確な把握、ある種の測量法として写実性を活用しようとした面のあることを否定できない。つまりは「斥候」という軍事的な用が求められたのである。

西川如見は『日本水土考』の序に「渾地萬國の圖は異邦の著す所にして、地理の學は之に憑りて以てその水土を察せずんばあるべからざるなり」と書き⁽⁴⁾、巻頭に「日本方角之圖」(図1)および「亜細亞大州圖」(図2)の二図をかかげるが、彼がこの書を著したのは、八代將軍徳川吉宗から天文に関する下問を受けた翌年、1720年(享保5年)のことである。1695年(元禄8年)、48歳の時に日本で初めての世界地誌『華夷通商考』を著した

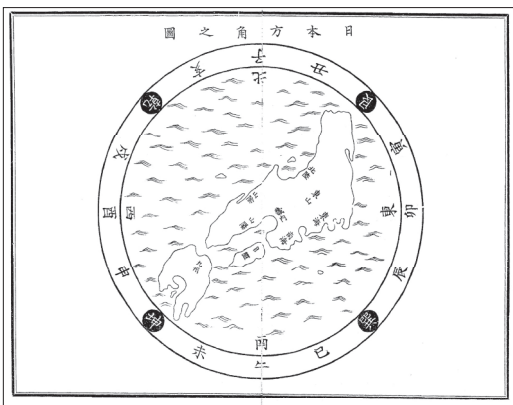


図1 日本方角之圖(1720年)
国会図書館デジタルコレクション「二川如見遺書 第9編 日本水土考」14~15Pより作製
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991289>

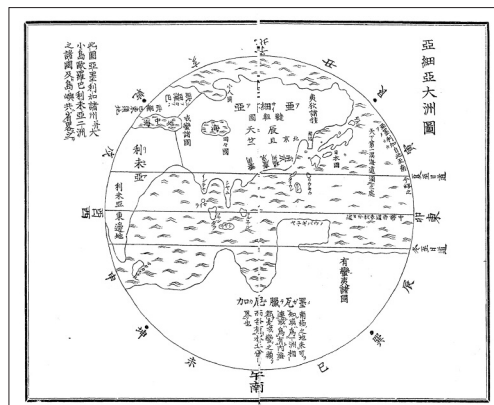


図2 亜細亞大州圖(1720年)
国会図書館デジタルコレクション「二川如見遺書 第9編 日本水土考」15~16Pより作製
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991289>

如見であるが、彼の言う「渾地萬國の圖」とは、マテオ・リッチらが作成した東洋最初の漢文による世界図「坤輿万国全図」(1602年)(図3)にほかならない。この世界図は、イエズス会宣教師たるリッチらが戦略的にあらわした世界図なのであって、それはすぐさま日本に輸入され、鎖国下の日本に絶大な影響を与えたものである。じつに1600年代は、西欧がアジアを、そして日本をマッピングしようとする一大転換期であったのだ。

1600年代の西欧による日本地図

世界最初の地図としてよく知られているのは、紀元前600年に作られたバビロニアの世界図である(図4)。これはもちろん現存する最古の文字が記された地図ということであって、地面に棒で引いたような一瞬の地図のことを考えれば、地図こそ人類最初の描写行為である、と断言する人のいることも理解できる。空間の一点から別の一点へと線を引く、それはすでに地図と呼べるものだろう。したがって地図の歴史は膨大で、研究書も枚挙に

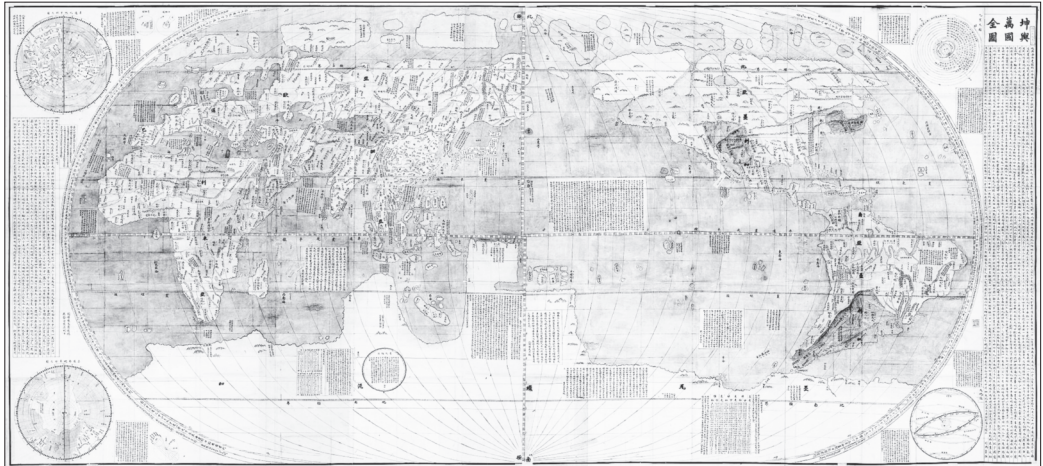


図3 坤輿万国全圖(1602年)



図4 バビロニアの世界図(紀元前700年?)



図5 ヴァルカモニカ渓谷岩絵に見る地図(紀元前1500年前ころ)

いとまない。さらに織田武雄は著書『地図の歴史』の冒頭に

「地図の歴史は文字の歴史よりも古い」といわれるが、近年、北イタリアのアルプス山麓を流れるカモニカ溪谷で、氷蝕を受けた岩壁に描かれた先史時代の地図が発見された。この地図は前一五〇〇年ごろ、カモニカ溪谷に居住していた青銅器時代の住民の村落と耕地を表わしたものと推定されている。

と書いている(図5)⁽⁵⁾。ヴァルカモニカ溪谷の岩絵群はイタリア初の世界遺産として知られるが、この例にとどまらず、人間が本来は移動する動物であったことを思えば、こうした発見はさらにさかのぼってゆくだろう。

しかし人間の空間をとらえる感覚には限界があり、感覚を超えた拡がりや想像の世界たらざるをえなかった。日本が西欧の地図上にあらわれるのは、マルコ・ポーロ『東方見聞録』があらわれてからのことだが⁽⁶⁾、コロンブスが第一回航海に携行したといわれるトスカネリ(Paolo dal Pozzo Toscanelli, 1397~1482)の地図には、おそらく現在のメキシコあたりにジパングが描かれていたのではないかと思われる。ヨーロッパが現実の空間に日本列島を定位するには、じかにその地を見て取る必要があったのである。鉄砲伝来として知られる種子島にポルトガル人が漂着した事件は1543年とされるが⁽⁷⁾、フランシスコ・ザビエルの来日は1548年、日本をくまなく知ることになるルイス・フロイスの来日は1563年である。相当に正確な日本の地理的位置づけは1600年代を待たなくてはならなかった。

国際日本文化研究センターの提供するデータベースに“Database of all rare books and maps related to Japan”があり、地図については1550年にドイツで刊行された世界図からはじまるが、そのうちの「1600s Maps」⁽⁸⁾には1600年代に刊行された日本を掲載する地図の一覧があり、25点があげられている。もちろん1600年代に刊行された日本関連地図はさらに多数あるのだが、大概の傾向を見るためにこのデータベースに掲載されている地図を以下にしめしておく。また文禄4年(1595年)に製作された日本地図(図6)と同年に製作されたイギリス刊行の日本図(図7)⁽⁹⁾を比較のためここにあげておく。地図の表題は主要部分にとどめ、発行地・刊行年を附し、便宜のために仮番号を加えて以下に記す⁽¹⁰⁾。

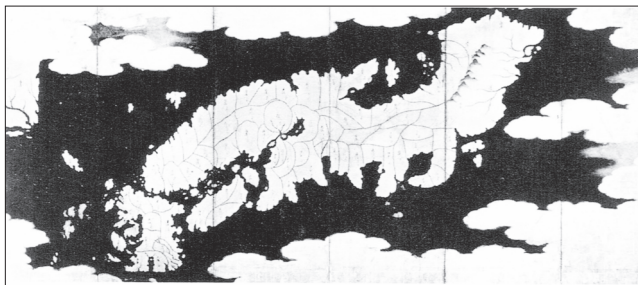


図6 日本図(1595年)八曲屏風 福井県立若狭博物館蔵



図7 テイセイラによる日本列島図(1595年)

1. TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI [Antwerpen, c1603] (図 8)
2. IAPONIA [Amsterdam, 1606] (図 9)
3. CHINAE, olim Sinarum regionis, noua descriptio. [London,1606] (図 10)
4. ASIA [Amsterdam, 1607] (図 11)
5. DESCRIPTIO INSVLARVM IAPAN [Amsterdam: Jocosus Hondius, 1616] (図 12)
6. ASIAE NOVA Descriptio Auctore Jodoco Hondio [Amsterdam, 1619] (図 13)



図 8 (1603年)



図 9 (1606年)



図 10 (1606年)



図 11 (1607年)



図 12 (1616年)



図 13 (1619年)

7. ASIA with the Islands adjoining described, the atire of the people [London, c1627] (图 14)
8. IAPONIA Petrus Kaerius Caelavit [Amsterdam: Jan Evertsz. Cloppenburch, 1630] (图 15)
9. ASIA noviter delineata Auctore Guiljelmo Blaeuw [Amsterdam, c1635] (图 16)
10. IAPONIA. NOVA DESCRIPTIO [Amsterdam, 1636] (图 17)
11. CHINA Veteribus SINARVM REGIO [Amsterdam, c1636] (图 18)
12. ASIA recens summa cura delineata. Auct. Henr. Hondio. 1641. Amstelodami. (图 19)



图 14 (1627年)



图 15 (1630年)



图 16 (1635年)



图 17 (1636年)



图 18 (1636年)



图 19 (1641年)

13. CHINA [London, c1646] (図 20)

14. IAPONIA et TERRA ESO [Amsterdam, 1651] (図 21)

15. IAPONIA REGNVN [Amsterdam, 1655] (図 22) (A)

16. IMPERII SINARVM NOVA DESCRIPTIO [Amsterdam, c1655] (図 23)

☆ *Nova et Accourata Iaponiae Terrae Esonis.....* (1659 年ころ) (図 24) (B)

17. TABULA TARTARIAE et majoris partis REGNI CHINAE. [Amsterdam, c1660] (図 25)



図 20 (1646 年)



図 21 (1651 年)

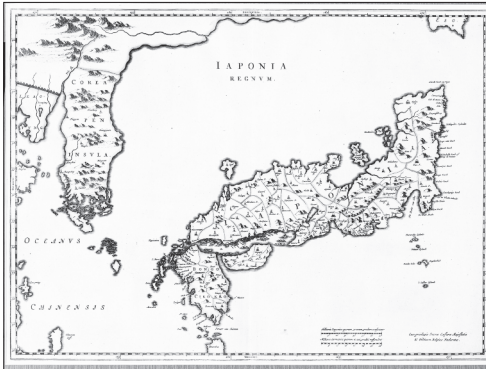


図 22(A) IAPONIA REGNVN (1655 年)



図 23 (1655 年)

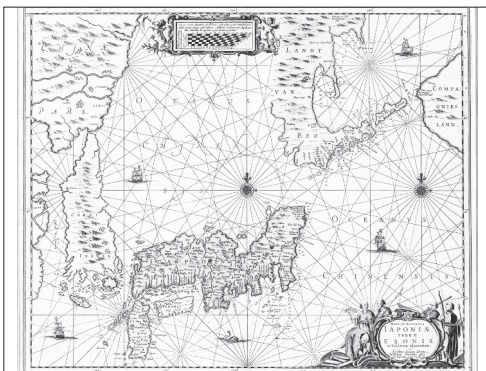


図 24(B) Nova et (1659 年)



図 25 (1660 年)

18. ISLES DU JAPON (図 26)

19. INDIA quae ORIENTALIS dicitur, ET INSVLÆ ADIACENTES. [Amsterdam, c1662] (図 27)

20. NOVA ORBIS TABVLA, IN LVCEM EDITA, A. F. DE WIT. [Amsterdam, c1670] (図 28)

21. ROYAUME DU IAPON [Paris, 1676] (図 29)

22. The KINGDOME OF CHINA [London, 1676] (図 30)

23. II REGNO DELLA CHINA detto presentemente CATAY, e MANGIN.1682. (図 31)

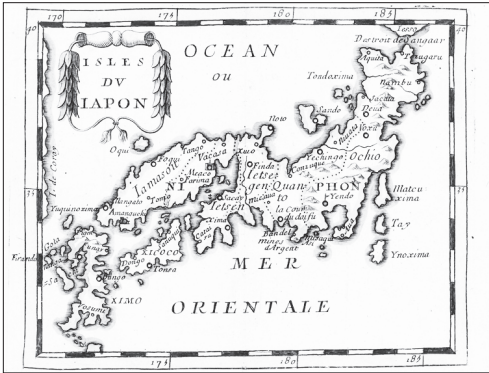


图 26 (年紀なし)



图 27 (1662年)



图 28 (1670年)



图 29 (1676年)



图 30 (1676年)



图 31 (1682年)

24. ISOLA DEL GIAPONE e PENISOLA DI COREA [Venice, 1692] (図 32)

25. NOVA ET ACCVRATA IAPONIAE. TERRAE ESONIS [ca 1694] (図 33)



図 32 (1692年)



図 33 (1694年)

これらの図のうち、日本列島を集中して描く図は、仮番号の 2, 5, 8, 10, 14, 15, 18, 21, 24, 25 の 10 葉である。15 は「IAPONIA REGNVVM」であり、これに☆の「*Nova et Accourata Iaponiae Terrae Esonis.....*」が加えて、1600 年代の西欧による日本図がおおかた見渡せることになるだろう。

ESO という空間

さて、ここでわれわれが目にするのは、その地図学上の正確さではない。すでに述べたようにプトレマイオス『地理学』の再発見とメルカトルらの登場によって、さらには大航海時代のはじまりとともに展開した世界探検の拡大によって、地図の正確さは飛躍的に発展した。しかし大地の計測はあくまで地球の表面上の移動から知られるのみであって、航空機や衛星による観測など想像の外の時代なのである。すべては人の歩みによる実測が基本なのだ。したがって人の歩みを拒む空間の地図は、ただ伝聞と想像によって描くしかない。1600 年代の地図を描くにあたって、日本周辺の空間はさまざまな理由から異邦人の視認を拒む terra incognita (知られざる大地) であった。危険な大海原や天高くそびえる大山脈、果てしなくひろがる砂漠といった自然の障害ばかりではない。そこには政治・経済・文化にまたがる高く切り立つ壁があったのである。

以下に、上にあげた日本列島を描く地図群の対照表を示す (表 1)。ここではとくに 3 点に視点を絞る。すなわち、1) 北海道、2) 朝鮮半島、3) 中国をどう描いているかに注目して地図を比較するものである。

マルコ・ポーロの描いた空想のジパング以降、種子島へのポルトガル人の漂着、イエズス

会宣教師の来日などによって、日本の実像が徐々に明らかになってくる過程については、たとえば岩波書店『大航海時代叢書』に代表される諸研究の進展によってますます明らかにされつつあり、ヨーロッパ各国の東インド会社などのアジア進出活動についても経済史的観点からのみならず、社会学・歴史学からの研究が進捗しつつある。ここでその詳細に言及する余裕はないが、地図上の3点の比較をもって今後の各研究への補助線を引いてみたいと思う。書き込まれた文字表記の検討などは、地図現物を調査できる機会を待ちたい。

これらの地図において、北海道にあたる地域の表記は、“ESO”(14)、“LANDT VAN ESO”(☆/25)、“Iesso”(18)、“TERRE DE IESSO”(21) などである。また23はこの地を“Tartari di Yupy”と記し、24は“TARTARIA DE YUPI”と記すが、これは伝統的な「タタール」の語を採ったものであろう⁽¹¹⁾。すなわち北アジアのモンゴル高原とシベリアとカザフステップから東ヨーロッパのリトアニアにかけての幅広い地域にかけて活動したモンゴル系、テュルク系、ツングース系およびサモエド系とフィン＝ウゴル系の一部など様々な民族を指す語である。ロシア史では、キプチャク・ハーン国による中世のロシア諸公国の間接支配のことを「タタールのくびき」と呼ぶが、16世紀になってロシアはこの支配から逃れるけれど、その後もクリミアやヴォルガ、シベリアなどに広く散らばるテュルク＝モンゴル系の人々をタタールと呼んで恐れ、彼らを完全に支配するには18世紀までかかっている。なおYUPIは民族名かと思われるが、まだ正確なところを確認していない。14ではESOのすぐ東側の海域に“Oceanus Tartaricus”(タタールの太洋)と記すが、これも同様のことである。

ここに簡単な年表を示すが(表2)、1600年代のロシアの東方政策にとってタタールはまさに「くびき」であって、ひいてはヨーロッパにとってもこの空間は、容易に踏みこむことを許されない空想の領域だったのである。その結果、日本を含め、長く北方アジアの

表 1

地図番号 (図版番号)	製作年	北海道 (ESO)	朝鮮半島	中国
2 (9)	1606	なし	大陸と切れている	広東など記載
5 (12)	1616	なし	一部を島状に描く	なし
8 (15)	1630	なし	大陸から独立	広東など記載
10 (17)	1636	なし	大陸から独立	広東など記載
14 (21)	1651	大陸とつながる	大陸と切れている	わずかな都市名
15 (A/22)	1655	ごく一部地名のみ	大陸の半島部	図のみで地名欠く
☆ (B/24)	1659	大陸の一部	大陸と切れている	都市名を欠く
18 (26)	年紀欠	ごく一部地名のみ	ごくわずか	なし
21 (29)	1676	ごく一部地名のみ	一部地名のみ	なし
23 (31)	1682	大陸の半島部	大陸の半島部	詳細な記載
24 (32)	1692	ESOの記載なし	大陸の半島部	なし
25 (33)	1694	大陸の一部 (?)	大陸と切れている	都市名を欠く

地図は完成を見ることなく、「坤輿万国全図」のいくつかのヴァージョンには北海道らしき島が東北の北方に描かれているのだが、それも最初のヴァージョンから書き込まれていたという保証にはならない。なぜならその島には「北海道」のみならず「佐渡」「加賀」などとも書き込まれているからである（図34）。おそらく鎖国下の日本から宣教師などをへて得た情報に基づくヴァージョンなのかもしれないが、これは今後の課題である。

このように北海道にあたる地域の地図表現はない場合が多く、あっても大陸と地続きであったり、一部を曖昧な形でしめすのみであったりと、不明瞭であるが、ただ一例、1655年刊行のIMPERII SINARVM NOVA DESCRIPTIO（図23）のみ、北海道付近に独立した島を

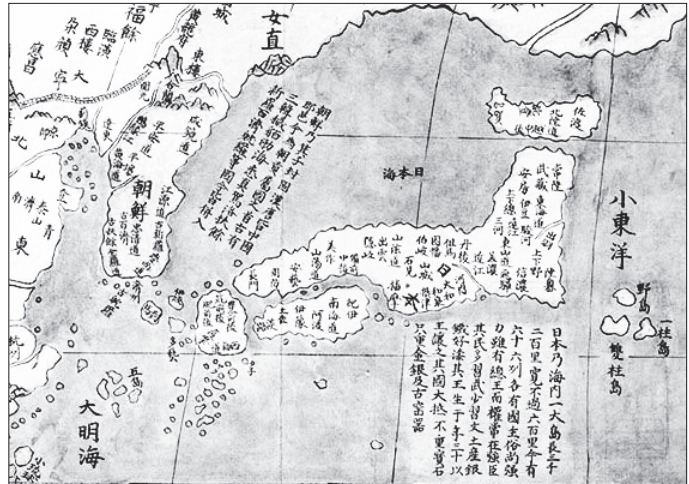
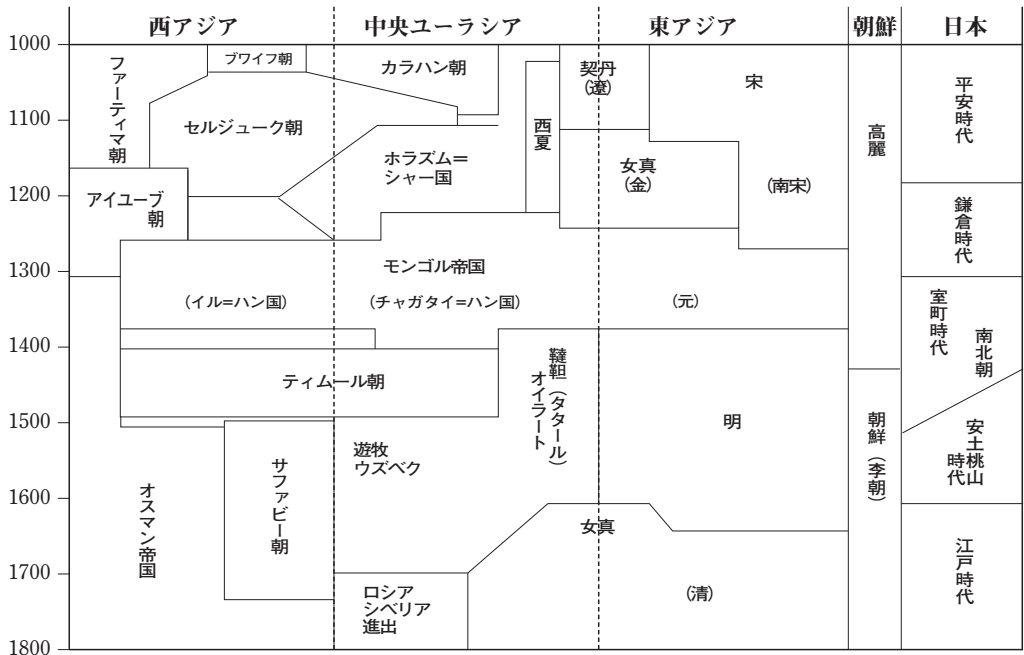


図34 坤輿万国全図（図3の部分図）

表2 アジア年表



描き"IESO"と書き込んでいる。その島の形は「坤輿万国全図」に似ているが、正しく地名を書き込んでいる点で異なっている。ただこの地図の作製者は、同年の IAPONIA REG-NVM と同じくジョン・ブラウ (Joan Blaeu, 1596-1673) とされるので、問題を残す⁽¹²⁾。

CORAI と CHINA

ESO とともに気になるのは、朝鮮半島の大きさと中国の小ささという特性である。表において朝鮮半島を「大陸と切れている」と書いたのは、朝鮮と中国大陸のあいだに海峡があるからである。本来なら鴨緑江が中国／朝鮮の国境をなし、三国時代にはこの大河のほとりに高句麗が丸都城を置いたし、高麗王朝末期には朝鮮王朝の太祖となる李成桂が鴨緑江の中州である威化島で反旗ののろしをあげたのだから、この川は象徴的に中国／朝鮮を切りわけている。しかし元の武官であった李成桂が権知朝鮮国事に冊されたのは1393年なのだから、朝鮮半島が中国と地続きであることなど1600年代には自明のことならなかったはずだ。それがなぜ海峡のように描かれたのか。

ここで注目すべきは明清交替という中国の政変である。明末清初などとも呼ばれるこの期間は、1) 1622年(天啓2年)の徐鴻儒による白蓮教徒の乱から1681年(康熙20年)の三藩の乱の終息までとする説、2) 16世紀末から17世紀初頭ととらえる説、3) 清による中国支配の開始(1644年)から鄭氏政権の崩壊(1683年)までと見る説などがあるが、いずれにせよ1600年代の中国は大きな政権の転換にのたうつ時代であった。

その明代中国にとっての重要な輸出品に、景德鎮に代表される陶磁器があった。17世紀から18世紀にかけてヨーロッパで流行したシノワズリ(中国趣味)には更紗や漆器などとともに陶磁器の占める部分が多く、その流行を牽引したのが香料と陶磁器を主要な商品としていたオランダ東インド会社である。その社名 Verenigde Oostindische Compagnie の頭文字を取って VOC と呼ばれた東インド会社は、その利益の大きな部分を景德鎮に頼っ

ていたのである。しかし明清交替の事態にいたって内乱の頻発、清朝成立時の貿易制限などが重なって、この豊かな財源を東インド会社は失いかげ、そこで目をつけたのが日本の肥前磁器だったわけである。

豊臣秀吉が文禄慶長の役、朝鮮側の呼称では壬辰倭乱という戦争をおこしたのは1592年から1598年にかけてのことだったが、そのさいに朝鮮から連行された陶工が肥前国に陶磁器産業を根づかせたため、この戦争を別名「やきもの戦争」と呼ぶまでになったことはよく知られている。とりわ



図 35 VOC 銘の有田焼

け鍋島直茂が連行した李参平が有田泉山にすぐれた陶石を発見し、白川天狗谷に窯を開いたのが有田焼の発祥とされている。それが1616年（元和2年）といわれるが、この陶磁器がVOCに見出され、輸出を開始するのが1650年（慶安3年）なのである。ここに1655年刊行の地図 IAPONIA REGNVN、1659年刊行の Nova et Accurata Iaponiae Terrae Esonis を重ね合わせることに重要な意味をもつ。

17世紀後半から18世紀後半にかけての時期に輸出された肥前磁器の数は、VOCの記録だけ見ても約370万個にのぼると見られている（図35）。オランダにとって香料に匹敵する重要な貿易品目であった陶磁器が、地図の形態に影響を与えたと見ることは無謀だろうか。先の IAPONIA REGNVN は地勢図の形式を採って日本と朝鮮を描いて中国をほぼ略し、Nova et Accurata Iaponiae Terrae Esonis はとくに「蝦夷」を特記する表題をもって海図（chart）の形式を採る。それは距離と方位の正確さを眼目とする地図ではなく、政治と経済の展望を見据えた地政学的（geopolitical）な地図ではなかったか。

もとより本研究ノートは結論を求めるものではなく、問題系の輪郭をなぞるにとどまるものである。願わくばこれらの問いを受け、地図学のみならず、政治・経済・社会・歴史など各方面からの考究・批判を待ちたいと思う。

おわりに

ここでは細かな議論は省略し、基本的なデータと問題系の所在を祖述することに限定して述べた。本学の入手したこれらの古地図については、語るべきことがまだ数々あるが、筆者の手に余ることなので、ここで各方面からのご助力をお願いしたい。

なお一言付け加えれば、とりわけ貴重な地図資料の採録をご許可いただいた日本文化研究センターに謝意を表したいと思います。また、これら古地図の選定・入手についてはおおくの方々からのご意見を仰ぎましたが、とくに本学大学院、社会文化総合研究科・現代社会文化論コースの卒業生である故・船越龍太氏とご家族には、不慮の事故で世を去った故人を偲ぶかたちで本学のアジア研究への寄与としてご助力を賜りました。ここにお名前を記して感謝のしるしとさせていただきますと思います。ありがとうございました。

— 注

- (1) http://www.dh-jac.net/db7/cortazzi/reference_j.htm
- (2) http://lib.s.kaiyodai.ac.jp/library/digital/seiyoukochizu/pages/201251232_2.html
- (3) ヤン・ヤンソニウスをはじめとするヨーロッパの高名な地図製作者については“List of cartographers” (https://en.wikipedia.org/wiki/List_of_cartographers) から個々の評伝・業績を引き出すことができる。
- (4) 西川如見『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』岩波文庫、13頁。
- (5) 織田武雄『地図の歴史 世界篇・日本篇』講談社学術文庫、第一章。
- (6) 写本の流布は14世紀から、活字化は1477年のドイツ語版から。
- (7) 1606年編纂の『鉄炮記』による。宣教師の記録、たとえばジョアン・ロドリゲス『日本教会史』な

どは 1542 年とする。

- (8) <http://shinku.nichibun.ac.jp/kichosho/new/books/00/suema00000001cyb.html>
Dataase of all, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto, Japan.
- (9) 「テイセイラによる日本列島図」として知られるこの図は、1570 年に出版された地図帳『慧海の舞台』(Theatrum Orbis Terraum) の補巻第 5 巻 (1595 年刊) に収められたもので、テイセイラ作と記されるが、じっさいの作者は明確でない。羽田孝之によるこの図の詳しい解説を <https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryu/map/001572916> に読むことができる。この図は以下のリストの 8(図 15)“IAPONIA”とほぼ同一に見えるが、一連の日本・朝鮮図の類型をしめす初出例としてここにあげておく。
- (10) 長い表題は主要部分に切り詰め、番号は松枝が付した。本学の所蔵に帰したのは 15 であり、*Nova et Accourata Iaponiae Terrae Esonis*.....はこのリストに掲載されないが、☆印を付して加えてある。
- (11) Tatar は、古チュルク語で「他の人々」を意味する tatar から派生した語で、中国語では「鞑靼」(dàdà)、ロシア語では Tarapa、ヨーロッパ諸語では Tartar、アラビア語では تارتار、ペルシア語では تارتار と表記される。ラテン語で Tartarus とは「冥府」の意で、「ぞっとするような」という形容詞としても用いられる。ちなみに奈良・二月堂の修二会のなか、咒師作法につらなる「達陀 (だったん)」の行法があり、『今昔物語』にも怪異なるものとしてこの語が出るが、これはパーリ語「ダッタ」(焼き尽くされる)を語源とする別語。
- (12) いくつかの評伝によれば、この年前後にジョン・ブラウはじつに多数の地図製作にかかわっており、複製も多数作られていることから、この 2 葉の地図とブラウとのかかわりを確認しがたい。今後の課題としたい。



図 A) IAPONIA REGNUM [日本図]・製作者：Martino Martini・
 出版社：Joan Blaeu・刊行：Amsterdam, ca.1655・41×56cm・銅版刷・手彩色

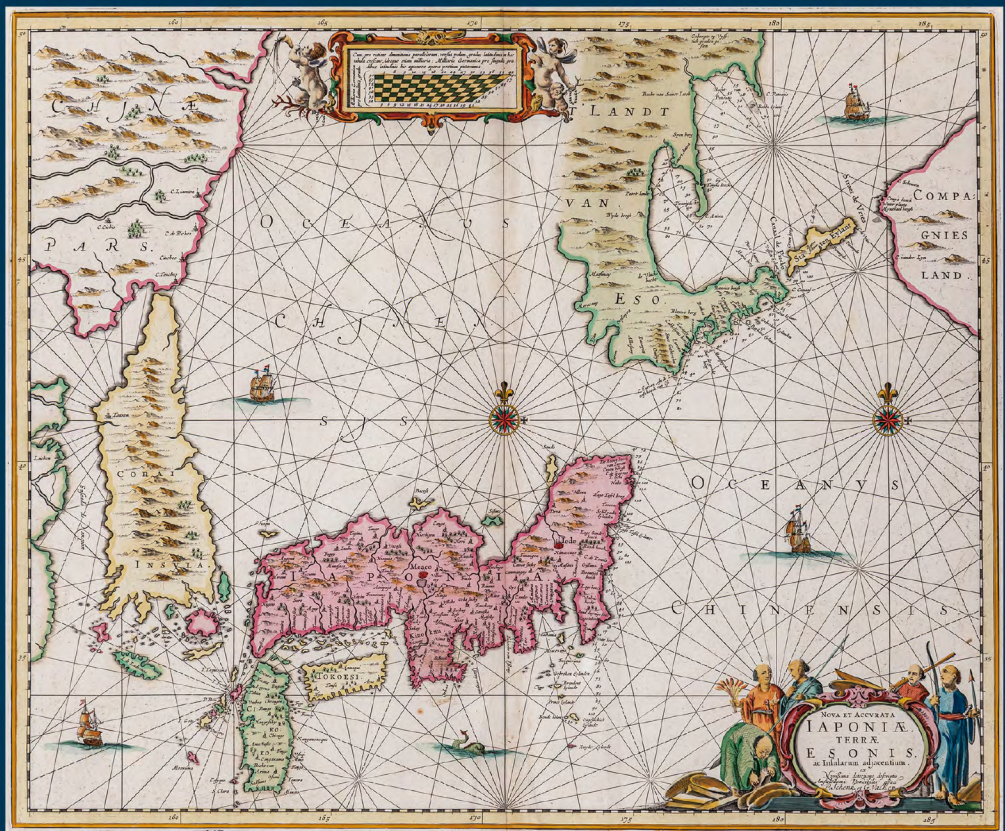


図 B) Nova et Accurata Iaponiae Terrae Esonis ac Insularum ex Novissima Detectione Descriptio Apud Ioannem Ianssonium [蝦夷地および日本列島の新詳細地図]・
 製作者：Jan Janssonius・刊行：Amsterdam, ca.1659・45.7×55.9cm・銅版刷・手彩色